

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

保育園番号	66-0439
保育園名	社会福祉法人楽山会椎の実子供の家

1. 活動のテーマ

〈テーマ〉

自然観察

1年を通じたカブトムシの幼虫・成虫の飼育、観察

〈テーマの設定理由〉

近隣の畑で野菜の収穫を行う機会があった際に、堆肥の中にたくさんのカブトムシの幼虫がいたので、土の中から掘出して園で飼育を始めることにした。

2. 活動スケジュール

2月幼虫の掘り起こし

毎日水の霧吹きを行う。飼育開始

3、4、5月飼育マット土の入れ替え幼虫の観察・定期的な飼育マットの交換

6、7月蛹観察の準備、実践・成虫の虫かご準備、飼育

7、8、9月成虫の飼育、観察

8、9月卵の確認、土の入れ替え

10、11、12月土の入れ替え、幼虫の確認

1、2、3月土の状態確認・入れ替え、霧吹きや手入れ

3. 探究活動の実践

<活動の内容> 令和6年度活動開始

- 用意した物…スコップ、飼育ケース、育成マットを準備した。
- 2月～3月にかけて園庭の落ち葉掃きを行い、定期的に近隣の畑に持っていき、畑にある堆肥作りのための穴に子どもと一緒に入れたり、農家の方と一緒にいった。堆肥作りのための穴に大量の落ち葉を子どもたちと運んだり、ふかふかの感触を踏みしめて楽しむ姿が見られた。また、「堆肥」とは何か、土の役割について子ども達と考えた。
- 畑の堆肥作りの際、土の中から幼虫をカブトムシの幼虫を見つける。30匹以上の幼虫を丁寧に1匹ずつ掘り起こし、飼育ケースに入れる際に想像以上の大きさに子どもたちは大喜びをしていた。短時間を決まりとし、少し触ってみるとその感触に驚く姿があった。なぜ素手で触ってはいけないのか等を子どもたちで意見を出し合い大切に扱っていた。



振り返り <振り返りによって得た先生の気づき>

- 普段から生き物に対する興味を持つ子が多く、園庭で虫探しをして観察を楽しむ姿は見られているが、カブトムシの幼虫は実物を初めて見る子どももいた。普段図鑑で見たことがある幼虫をいざ発見すると、驚きよりも嬉しさを話す姿があり、飼育ケースの準備を率先して行う等、飼育することを楽しみにしている様子だった。カブトムシの飼育を通じて、生き物の生態や命の尊さなどを学ぶ良い機会なので、心が豊かになる体験ができるように活動を展開していくことにする。

<活動の内容> 令和7年度継続

- ・用意した物…飼育ケース、腐葉土マット、子どもが土を移しやすい大きさのスコップ、土を広げるビニールを準備した。
- ・新しい土を用意し、スコップを使って飼育ケースの土を入れ替えた。始めに飼育ケース中の土をビニールの上に広げ、空になったケースには新しい土を入れた。次にビニールに広げた土の中にある幼虫を傷つけないように慎重に探すことを伝え、子ども達はスコップで幼虫を探し始めた。土の中で丸まって動かない幼虫を見つけると「生きているのかな？」と不安そうに様子を伺っていたが、しばらく観察すると動く姿が見られ「動いた！」と友達と目を合わせて喜びを共有していた。掘り進める中でスコップでは幼虫が傷ついてしまうことに気付くと、手探りで探し始める。幼虫の引っ越しを行う中で、一匹ずつ幼虫の大きさが違うことに気が付いたり、観察を楽しみながら土替えに取り組んでいた。



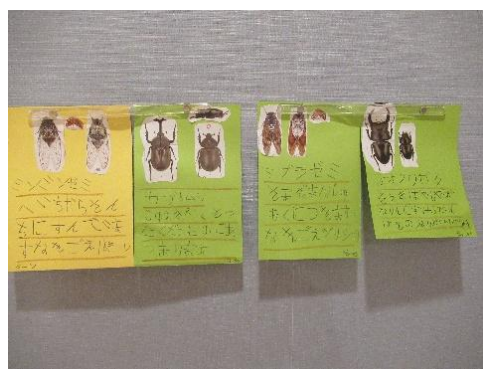
振り返り <振り返りによって得た先生の気づき>

- ・カブトムシの幼虫を初めて見る子どももいたので、実際に幼虫を手で持ち、近くで観察をすると大きさに驚く姿があったり、重さや体温等を肌で感じる体験ができた。自分達で土を入れ替え幼虫を移し替えることで、飼育に関して意欲的な姿がその後も見られる。今後も観察を楽しみながら、生き物への理解が深まるように取り組んでいきたい。

<活動の内容>

用意した物…飼育ケース、霧吹き、昆虫図鑑、画用紙を使った図鑑制作セットを準備した。

・新しく土を入れ替えた飼育ケースを保育室に持っていくと、興味を示し観察を行う子が増えた。遊びの時間に観察を行っている子もいるので、図鑑を使ってカブトムシの幼虫から成虫までの成長の過程を調べられるように道具を準備した。興味を持つ子を中心に、友達と一緒に図鑑と実物を見比べながら、まだ今の幼虫が3齢幼虫という形態であることや、これから蛹になることを観察の中で気づき、早く成虫になってお世話をしたいことを話す姿や、蛹になるまで毎日霧吹きをすることを話していた。



4. 振り返り <振り返りによって得た先生の気づき>

・道具を用意すると、観察だけでなく図鑑と実物を見比べながらノートを作ることを楽しみ、生き物への理解を深めていくことができた。まだ幼虫の姿ではあるが、調べていく中で次第に変化していくカブトムシの姿を想像しながら、期待を持って成長を追っていく姿が見られている。子どもによって興味の度合いは違うが、興味を持つ子が作ったノートを室内に掲示することで、それを見て“作ってみたい”という気持ちになる子どもいた。興味を持つ入口は様々なので、子どもの興味を持つサインを見逃さず、次に繋げていきたい。また、縦割り保育の中で異年齢児が共にお世話をしたり年長児が年少児に図鑑を読んであげる等、普段の関わりでは見られない子ども同士のやりとりにも繋がっている。異年齢の関わりから思いやりを育む機会になったと感じた。

<活動の内容>

・用意した物…飼育ケース（小）、切り込みを入れたトイレットペーパーの芯、畳んだトイレットペーパー、スプーン、霧吹きを準備した。

・子ども達と土の中の様子を見て、幼虫が蛹室を作っていることに気付いた。蛹になれば触っても平気であることを調べて、観察するために土を掘り起こしてみることにした。蛹を傷つけないように、慎重に道具を使いながら掘り進めていくと、蛹を発見した。普段カブトムシの蛹を見る機会がないので、蛹の状態でも元気に動き出すことに驚き、手で持ってみると少し温かいことを話していた。数匹見つけた後は、自分達で作ったトイレットペーパーの芯を使った飼育ケースに蛹を移動し、羽化まで観察してみることにした。クラスの集まりの中で蛹の観察をすると、ほとんどの子が図鑑でしか見たことがなかったので、実際に蛹を手にとってみて、図鑑と色や形が一緒なことに気付いていた。保育室に虫かごを置いておくと、毎日虫かごの前に座り図鑑を用いて観察を行い、羽化を心待ちにしている。



4. 振り返り <振り返りによって得た先生の気づき>

・普段は図鑑でしか見られない蛹に実際に触れる体験ができたことで、生き物の細かな変化や飼育への意欲に繋がっている。そのような体験を経て観察への意欲が高まり、毎日の細かな変化や気付きに繋がる子が増えた。図鑑で調べるだけでなく、肌で触れる体験が子ども学びにとって重要なことである。五感で学べる機会が増えるように、今後も活動を考え提供していく。

<活動の内容>

・用意した物…カブトムシ飼育ケース、木の枝、昆虫ゼリー
・子ども達が蛹の観察や飼育ケースの手入れを行っている時、土の中から成虫が出てきたことを発見した。成虫用のケースを用意し、土と止まり木、昆虫ゼリーの準備をした。出てきた成虫を手で持って移し替えていくと、足がトゲトゲしていることや細かい毛が生えていること等、お世話をしながら成虫の細かな部分の観察を行う事ができた。今は毎朝カブトムシの姿が見えるか確認し、餌やりと霧吹きで土を湿らせることを日課にしている。成虫の観察をしながら絵を描いてみたり、細部まで色塗りを楽しむ子もいた。



4. 振り返り <振り返りによって得た先生の気づき>

・成虫を間近で観察する体験をすることで、図鑑だけでなく実際に細部まで観察をすることができ、それを個人で記録して理解を深めることができた。お世話をする中でさらに関心が高まり、観察の中で虫かごの汚れに気づき拭き取るなど、日頃の観察からお世話をする意欲にも繋がっている。

<活動の内容>

- 用意した物…カブトムシ飼育ケース、小型カメラ
- まだ成虫になっていないカブトムシの様子を気にしている姿があったので、スマートフォンと接続して見る小型カメラを使って、土の中がどうなっているのか観察してみる。土をかき分けながらカメラを使って奥に進んでいくと、動いている幼虫を発見した。土の中を進んでいくカメラの様子を見て「カブトムシになるとこんな風に見えるんだ」と驚くと同時に、普段経験することのできない“昆虫目線”になって観察を楽しんでいた。



4. 振り返り <振り返りによって得た先生の気づき>

- 子ども達は毎日土の様子を気にして霧吹きをしながら観察を楽しんでいたが、新しい発見ができるように、カメラを使った観察を勧めてみた。普段と違う道具は子どもの興味をひきやすく、観察をより一層楽しむ機会を作ることができた。特にカメラが土の中を進むことは、普段は絶対見ることのできない景色なので、驚きや楽しかったことを話す姿も多かった。今後も色々な視野で新しい発見や観察を楽しめるように考えていく。

<活動の内容>

• 用意した物…カブトムシ飼育ケース、新聞紙、入れ替え用の土、スコップ
• 秋が近付き飼育ケースから成虫がいなくなったので、子ども達と卵があるか確認する。新聞紙を敷き土を広げて、手探りで卵を探す。卵を見たことがない子がほとんどのため、まずは保育者が一つ見つけてみると、成虫と比べて小さいサイズの卵に驚きを見せていた。本物の卵を見たことで自分達でも探せるようになり、土を優しくかき分けながら卵を見つけていた。全て見つけた後は、卵を幼虫に孵せるようにお世話を頑張ることを話す姿があった。



4. 振り返り <振り返りによって得た先生の気づき>

大人からすれば見た事のあるカブトムシの卵に驚きを見せることは少ないが、子どもは図鑑でしか見たことがない子も多いので、自分の手で探して見つけることが、発見の喜び・気づきに繋がっている。ここから幼虫に孵るまで時間がかかり、見た目での変化が少ない時期になってくる。そのような時期でも気持ちが途切れず、期待を持ってカブトムシの世話ができるようにしていく。

<活動の内容>

- 用意した物…カブトムシ飼育ケース、霧吹き
- 保育室入り口に飼育ケースを置き換えたので、子ども達が入室した時すぐに観察ができるようになっている。朝自分達の準備を終えると「霧吹きしていい？」と率先して声をかけてくる。霧吹きの水を入れるところから子ども達に任せると、1人は水を入れに行く係、次は霧吹きをする係など、自分達で役割を回しながらお世話に勤しんでいる。順番に行っていく中で、「ありがとう」や「次いいよ」など優しい言葉がけも増えている。



4. 振り返り <振り返りによって得た先生の気づき>

子ども達の動線の中に飼育ケースを置くことで、引き続きカブトムシに興味を持ち、お世話を行っている。飼育ケースの土の中に時々幼虫の姿が見えることがあるので、それも子ども達がお世話に積極的になる理由の一つだと思われる。また今回気付いたのが、子ども同士で声を掛け合って順番を作ったり、分担をしているところである。飼育を通して、社会的なルールや決まりも学んでいるのだと感心する出来事だった。